



5年ぶりのイラクへ

JIM-NETは、今年の6月で結成5周年を迎えます。イラク戦争から6年も経てば現場のニーズも大きく変わって当然のはずでした。当初の予測は、医薬品の不足は、復興が進むにつれて落ち着くので、我々は、より専門的な領域での支援に踏み込み、がんや白血病の治癒率を上げるというものでした。しかし、治安は悪化するばかりで、復興は進まず、支援の医薬品の量を減らすことはできませんでした。2004年から日本人がイラク国内に入ることができなくなり、技術的、あるいは学術的なレベルを高



めることもあまりできませんでした。我々の支援の成果は、白血病で言えば5年生存率は、それほど上がらないものの、延命にはなっているという感じでしょうか？ただし、このような環境でも支援を絶やすことなく続けてきたことの意味は大きく、我々の支援が無ければ、状況は、もっと悪くなっていたでしょう。

治安がよくなったという知らせが最近聞かれるようになりました。だとすると、まさに我々が望んでいた状況が到来したわけです。早速、現場でセキュリティ対策チームを組んで、イラク入国を検討しました。我々には、3つのチャンスがありました。

一つ目は、アンバール州です。私たちは、2008年1月から、アンバール州のアルワ



サブリーンと一緒に

リード難民キャンプに関わってきましたが、セキュリティの問題で、キャンプ滞在は、せいぜい半日でした。しかし今回は、3月16、17日の二日間キャンプに滞在しました。ここは、バグダッドのパレスチナ人たちが、主にシーア派民兵による迫害から逃れてきたところです。滞在中は、難民の苦境を具体的に理解し、必要な支援について調査しました。また、近くの難民の子どもたちが通う小学校を訪問したところ、戦火の爪あとがくっきりと子どもたちにも残っていることもわかりました。

私が6年前にバグダッドで出会った少女、メルバットが、このキャンプに逃げてきて

いました。15歳になった彼女は分厚いノートにぎっしりと詩(8ページ参照)を書いています。彼女の存在は砂漠の中に輝くダイヤモンドのようで勇気づけられました。

二つ目は、北イラクです。クルド自治区の治安は安定しています。日本政府も危険度を下げ、最近では、JICA(国



産科小児科病院で日本の支援者たちを歓迎する子どもたち

際協力機構)が事務所を構えました。アルビルのがん病院からの支援要請などについて、私たちは調査に行くことになりました。奇しくも3月20日のイラク開戦の日、私たちは、アンマンからアルビルへ飛行機で向かいました。かつてフセイン政権は自国の民であるクルド系住民に化学兵器を使用しており、このような残虐な政権は、国際社会にとってきわめて脅威であるというのがイラク戦争開戦の理由の一つでした。クルドの人たちは、こういう理由で戦争が始まり、多くの犠牲者が出ていることをどう思っているのか、聞いてみたいとも思っていました。残念なことに、多くのクルド人は、フセイン政権を転覆させるためには、戦争しかなかったと考えているようです。

そして三つ目はバスラです。イラク政府保健省が主催する第一回バスラ国際腫瘍学会へ招待されたのです。バスラの治安は、本当に大丈夫なのだろうかと不安でしたが、最終的には、イラク政府がすべて治安を確保、アメリカのNGO、IMCのガイドラインに沿って行動することになりました。したがって、会議以外は、病院を訪問するのみというきわめて限られた行動でしたが、今まで支援してきたサブリーンやハウラ、そして、ザイナブ・カマルが元気な姿を見せてくれました。サブリーンは、オーストリアの団体が義眼を作ってくれると約束してくれたと、とてもうれしそうでした。

バスラの町は、とても汚く、街中、汚水のおいが漂っています。そして、スクラップだらけの貧困地区がたくさん広がっていて、ここで暮らしていくのは厳しいというのが実感でした。5年ぶりのイラク。本当に感慨無量でした。詳細はHPなどで紹介していきたいと思います。これからもJIM-NETは支援を継続していきます。

佐藤 真紀(事務局長)

■ 支援実績 (単位=円)	08年 4月	5月	6月	7月	8月
バグダッド 子ども福祉病院	1,250,097	610,178	1,038,952	636,827	681,717
バグダッド セントラル病院	376,987	189,293	348,025	111,364	126,858
モスル イブン・アシール病院	632,442	557,303	568,496	344,633	806,093
バスラ 産科小児科病院	649,834	818,415	645,437	866,041	878,926
合計	2,909,359	2,175,188	2,600,910	1,958,864	2,493,594

最新イラク情勢 ～アンマンから～

これまで安定傾向にあったイラクの治安ですが、4月は情勢が悪化しました。内務省、防衛省、保健省の発表によると2008年9月以来、テロ事件による死者は最悪の355人に達しました。大規模な爆破事件が起こったことによって被害者の数も増えました。情勢悪化の原因ひとつとして考えられるのが、米軍の撤退が間近に迫っていることです。パキスタン、アフガニスタンへの比重を大きくするという米軍の間隙を突く形で、様々な武装勢力が再び暗躍を始めています。

4月26日のシーア派聖廟マルキド・カーズィーミヤ廟爆破事件は、イラン人巡礼者51人が死亡するという大惨事となりました。当初、アル・カーイダの犯行とされたこの事件ですが、イラン系武装勢力「マジャーミーウ・ハーッサ」が背後にいたのではないかとされています。米軍は、「これで、イラクに潜伏する残るテロ組織の裁きには長い時間がかかる」とコメント。イランのアフマディネジャド大統領は「今回の事件は、アメリカの占領がもたらしたもの」とコメントし、事件発生責任がアメリカにあるとしました。しかし、アメリカ側は今回の事件にはイランが関与しているとみており、クートにおいて軍事作戦を展開、爆破事件の背後にいるとされるマジャーミーウ・ハーッサの拠点に急襲し、メンバーを逮捕しました。しかしこの作戦で、民間人2人が死亡しました。

イランからの支援を受けている武装勢力の中には、上記の他にも数十を超えるグループが、現在イランから武器や資金供与を受け、テロ事件を引き起こしていると見られています。イラク国内における宗派对立の再燃が目的でしょうか？ さらにこうした事件が増加する背景として、姿を見せなくなって久しいシーア派反米組織の指導者ムクタダ・サドル師のイランからの帰還が近いという観測もあります。イランのコムで法学者としての勉強中であったムクタダ・サドル師が、資格を得てイラクに戻ってくるというのです。それに呼応する形で彼の配下にある勢力が再び反米活動の狼煙をあげています。

米軍撤退後、イラク軍のみで治安を維持できるかどうか、今後大きな焦点となります。イラク内務省は、今月初め、最重要指名手配犯であった武装グループ「イラク・イスラーム国家」のリーダー、アブー・ウマル・アルバグダーディーを逮捕したと大きく報道しました。イラクにとっては、自身の力で米軍撤退後も治安維持ができることを証明する大きなチャンスでした。しかし逮捕の報道直後にアブー・ウマル本人か

9月	10月	11月	12月	09年 1月	2月	合計
1,525,530	349,566	498,910	600,798	1,429,128	648,187	9,269,890
—	—	64,012	195,715	—	211,270	1,623,522
279,820	—	192,886	487,011	549,389	949,882	5,367,953
818,773	788,184	772,154	702,843	710,042	784,827	8,435,476
2,624,123	1,137,750	1,527,962	1,986,366	2,688,560	2,594,166	24,696,841

らの声名が出され、逮捕された人物は全くの別人であると主張しています。イラク当局はこれを受けて、逮捕された男はアブー・ウマルであるとして、この声名を否定しました。米軍撤退後のイラクの治安に関する不安をいまだに払拭できない状況です。米軍は、カズィーミーヤ廟爆破事件直後、「イラクには活動を続ける武装勢力が依然多く、すべてを裁くまでには長い時間を要する」とコメントしました。また撤退時期を遅らせる可能性も示唆しています。バスラに駐留していた英軍も任務を終え撤退を開始していますが、イラク側と独自に協定を結び400人の小部隊をイラク軍のサポートを行うために残留させる構えです。

治安がまだまだ安定していないことは、5月13日に発生した、在イラク日本大使襲撃事件からも明らかです。アンバール県にあるラマーディー公立病院を大使が視察した際、何者かが、付近の建物からライフルで狙撃し、大使の警護にあっていた一人が死亡しました。安定傾向にあったはずの治安ですが、万全の体制にはほど遠い状況だといえるでしょう。

加藤丈典(JCF/JIM-NET)

レポート 緊急報告会 イラクは今… (4月17日 高田馬場シロアム教会)



あいにくの雨の中、急な開催であったにもかかわらず、40名ほどの方が、佐藤真紀事務局長、加藤丈典駐在員(JCF/JIM-NET)の話に熱心に耳を傾けてくださいました。

報告会では、3月から4月にかけて佐藤・加藤両名によって行なわれたクルド地区の病院と難民キャンプの視察で撮影した映像を交えながら、イラン系クルド人難民、そしてイラクの前政

権の庇護を失い、国境付近で難民生活を送るパレスチナ難民に焦点を当てて話が進められました。

クルドとパレスチナの問題は、中東の中でも歴史的に複雑な経緯を持つ難問です。例えば、イラクーヨルダン国境の緩衝地帯にあるトリビル難民キャンプに暮らすイラン系クルド人に対して、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は、より快適な住環境のイラク国内のクルド地区カワ難民キャンプへの移動を勧めています。トリビルのイラン系クルド人達は、政治的理由でこれを拒否し、あくまでも第三国への出国を求めるなど、当事者の思惑が様々に交錯し、容易に解決の糸口がつかめない状況です。

いかに現状を打開すべきか、将来への展望が見えにくい中で、JIM-NETは、診療所のラボ開設への協力、急病人の搬送や医療費の支援などを行なっていることが事務局長から報告されました。

クルド地区の病院に関しては、イラクの他の地域に比べ、規模も小さく、設備も立

ち遅れていて、改善されなければならない状況であり、今後はクルド地区の情報収集をしつつ、支援の可能性について調査・検討していくことが報告されました。

※ 当日の配布資料は、下記URLから閲覧・ダウンロード可能です。郵送をご希望の方にはお送りいたしますので、事務局宛にご請求ください。

<http://www.jim-net.net/DATA/2009/handout090417.pdf>

ヒロシマからイラクへ (限りなき義理の愛大作戦最終イベント)



鎌田實代表の講演

2月22日、文京学院大学の仁愛ホールというたいへん立派な大ホールをお借りし、映画とトークの会『ヒロシマからイラクへ～放射能に脅かされる子どもたち』を開催しました。

大きなイベントなので、事務局スタッフだけではとても人手が足りません。当日スタッフとして、ボランティアのみなさんに来ていただきました。

「サダコ」・虹基金の夜川けんたろう代表が開会を告げた後、1958年の映画『千羽鶴』が上映されました。

『千羽鶴』は、封切られた当時は各地で上映され、たくさんの児童・生徒たちに感動と共感を呼びましたが、その後長い間忘れ去られていましたが、今年の「被爆者の声をうけつぐ映画祭」での上映をきっかけにDVD化して日本だけでなく世界の人々に見てもらおうという声も沸き起こっています。

この日も、「『千羽鶴』には涙が止まらなかった」という声が数多く聞かれました。

休憩の後、佐藤真紀事務局長のイラク報告、鎌田實代表の講演『命・環境・平和を語る』があり、ヒロシマからイラクへとつながる放射能による健康被害に対する唯一の被爆国の市民としての私たちの役割ということについて、皆さんと一緒に考えることが出来たのではないかと思います。

3月20日 二つのライブ

イラク戦争から6年目のこの日、2か所でお話しと演奏をさせていただきました。

午前中は、朝鮮・パレスチナへの訪問や、使われなくなったピアノの再生など、音楽を通じて環境のこと・世界の平和のことを伝える、「地球ハーモニー」という活動を続けているジャズピアニスト河野康弘さんの「被爆ピアノ・ボルドウィン～あったかコンサート～」。

河野さんが演奏したこのピアノは米国ボルドウィン社製。戦前、広島河本明子さん一家がアメ



被爆ピアノ ボルドウィン

- 日時：5月9、16、30日、
6月6日(土曜日) 11:00～17:00
- 会場：サロン・ド・カフェ・こもれび
(新宿区新小川町8-20こもれび荘)



昨年9月、もやいのサロン・ド・カフェ・こもれびで開催していた、東ティモールのコーヒー生産者らの絵画展に行っ

た際、もやいの稲葉剛理事長と湯浅誠事務局長の現在の活動が、湾岸戦争の反戦運動に始まっていることを知りました。湾岸戦争と日本の貧困問題がどういう経緯で繋がっていったのか、大いに興味をそそられ、この人達といつか共同で何かが出来ればと思ったのでした。

そして今年になってから、「サロンを訪れる生活困窮者の方をはじめ、もやいの活動や貧困問題に関心のある方たちに、ぜひイラクの子供達が描いた絵を見ていただき、日本だけではなく、中東の問題にも関心を向けるきっかけになってほしい」という、もやいからの絵画展開催の呼びかけにJIM-NETが応える形で、この度の絵画展が実現することになりました。

世界の戦場では、各国の貧困層の若者同士が戦わせられるという構図が出来上がりがつあります。(既に出来上がっているのかもしれませんが…)

イラク戦争を始めたブッシュ前政権による富裕層優遇税制をはじめとする経済政策は、アメリカ社会の経済格差を拡大し、ホームレス人口を急増させました。そして、いち早くアメリカ・イギリスによるイラク攻撃を支持し、自衛隊のイラク派遣を強行した日本の小泉政権が行った社会保障政策・経済政策もまた、現在の日本の貧困問題を作り出す元凶となっています。この二つの政権による戦争を支えたものは、民営化という言葉に象徴される社会保障の削減でした。そして貧困問題は、そこからまた、世界の戦場との繋がりを生み出しています。

アメリカ軍のリクルーターは、大学進学などの「餌」をちらつかせながら、貧困層の若者たちをイラクやアフガンの戦場に送っています。アフガンでは、貧しい若者たちがタリバンにリクルートされています。もやいにやって来る若者たちを狙って自衛隊への勧誘が行なわれるということも現実に起きています。もやいで絵画展は「貧困と戦争」ということに目を向けることでもあると考えています。

もちろん、絵を通してイラクの子どもたちにも目を向けることも忘れないください。この絵画展で展示している絵は、イラク戦争開戦から6年を経た今も、イラクの人々とりわけ子どもたちにとっては、「戦争」がいまだに進行している現実であり、いかに彼らに苦難を与えているのかということをお話しています。

絵画展という、ほんの小さな試みではありますが、海外支援NGOと国内の貧困問題に取り組むNGOが、それぞれの活動内容を知ることから始め、それぞれの活動を理解し、問題意識を共有することで、戦争と貧困という文脈の中で平和構築ということを考えるきっかけとなることを願っています。

熊谷 宏 (事務局)

- 日時：5月9、16、30日、
6月6日(土曜日) 11:00～17:00
- 会場：サロン・ド・カフェ・こもれび
(新宿区新小川町8-20こもれび荘)



昨年9月、もやいのサロン・ド・カフェ・こもれびで開催していた、東ティモールのコーヒー生産者らの絵画展に行っ

た際、もやいの稲葉剛理事長と湯浅誠事務局長の現在の活動が、湾岸戦争の反戦運動に始まっていることを知りました。湾岸戦争と日本の貧困問題がどういう経緯で繋がっていったのか、大いに興味をそそられ、この人達といつか共同で何かが出来ればと思ったのでした。

そして今年になってから、「サロンを訪れる生活困窮者の方をはじめ、もやいの活動や貧困問題に関心のある方たちに、ぜひイラクの子供達が描いた絵を見ていただき、日本だけではなく、中東の問題にも関心を向けるきっかけになってほしい」という、もやいからの絵画展開催の呼びかけにJIM-NETが応える形で、この度の絵画展が実現することになりました。

世界の戦場では、各国の貧困層の若者同士が戦わせられるという構図が出来上がりがつあります。(既に出来上がっているのかもしれませんが…)

イラク戦争を始めたブッシュ前政権による富裕層優遇税制をはじめとする経済政策は、アメリカ社会の経済格差を拡大し、ホームレス人口を急増させました。そして、いち早くアメリカ・イギリスによるイラク攻撃を支持し、自衛隊のイラク派遣を強行した日本の小泉政権が行った社会保障政策・経済政策もまた、現在の日本の貧困問題を作り出す元凶となっています。この二つの政権による戦争を支えたものは、民営化という言葉に象徴される社会保障の削減でした。そして貧困問題は、そこからまた、世界の戦場との繋がりを生み出しています。

アメリカ軍のリクルーターは、大学進学などの「餌」をちらつかせながら、貧困層の若者たちをイラクやアフガンの戦場に送っています。アフガンでは、貧しい若者たちがタリバンにリクルートされています。もやいにやって来る若者たちを狙って自衛隊への勧誘が行なわれるということも現実に起きています。もやいで絵画展は「貧困と戦争」ということに目を向けることでもあると考えています。

もちろん、絵を通してイラクの子どもたちにも目を向けることも忘れないでください。この絵画展で展示している絵は、イラク戦争開戦から6年を経た今も、イラクの人々とりわけ子どもたちにとっては、「戦争」がいまだに進行している現実であり、いかに彼らに苦難を与えているのかということをお話しています。

絵画展という、ほんの小さな試みではありますが、海外支援NGOと国内の貧困問題に取り組むNGOが、それぞれの活動内容を知ることから始め、それぞれの活動を理解し、問題意識を共有することで、戦争と貧困という文脈の中で平和構築ということを考えるきっかけとなることを願っています。

熊谷 宏 (事務局)

